

国際競争力が繁栄の源——冷戦後のグローバルバリエーション

1945年（昭和20年）、米国をはじめとする連合軍に対して最終的に日本が降伏することにより第二次世界大戦が終結してから間もなく、米国と旧ソ連との間で、双方が保有する核兵器の恐怖の均衡による冷戦が始まった。それが、1989年11月に冷戦中に敵対していた東西両ドイツの国民双方の手によって東西の勢力を分ける象徴的存在であったベルリンの壁が崩壊し、さらに、1991年11月には旧ソ連が12の共和国に分裂独立したことで、冷戦が終焉を遂げたことされ、それはまた民主主義の勝利とされた。

世界の殆どの国々を米国とソ連とを旗頭とする二つの勢力圏に分けて敵対していた冷戦が終わったことによって、東西両陣営を厳しく隔ててきた鉄のカーテンと言われていた各国間のフエンスが低くなった。ヒト・モノ・カネ・情報が急速に相互に交流し、グローバルバリエーションの時代となった。

「インテリジェンス立国」

グローバルバリエーションの流れは、当時から並行して進展していたIT革命によって加速され、個人も企業もまた国家にも国際競争力を高めることが生存と繁栄の道である

と「インテリジェンス立国」を二本柱とすることにある。日本ないし日本人は、インテリジェンス・リテラシーを高めることにより、海外、特に欧米からは「ナイーブ（バカ單純な）」ないしは「ガリブル（騙されやすい）」と蔑視されてきた知能レベルからの脱却を果たし、洗練され

「インテリジェンス立国」を構築するヒント

あなたのインテリジェンスレベルはどのていどか——資源に乏しい日本は、「科学技術立国」であると同時にソフトウェアを駆使する「インテリジェンス立国」を目指さなければならぬ。洗練されたチエはどうしたら得られるのだろうか。



宮脇 磊介
初代内閣広報官

ことが強く印象づけられた。日本のように民主主義の国家にあっては、国民一人ひとりの競争力が企業や国家の競争力の基盤となることは言うまでもない。

たチエと手法をもって万事に対応でき、きるようにならなければならない。

そうした環境下において、日本が繁栄する途は何か。天然資源に乏しい日本繁栄の方途は、「科学技術立国」

「インテリジェンス」の語は多様な意味を持つが、ここでは「チエを働かせること」を意味する。インテリジェンスの高い国として、イשראלとスウェーデンを挙げることはできる。ただし、両国は性質を異にする。イスラエルは、国家生存のために核兵器を保有し強力な情報機関による各種情報活動を世界に展開する、ハードパワーによるインテリジェンス立国である。一方、スウェーデンは、ノーベル賞を發出して世界をリードするとともに、国家安全保障に関する研究レベルや技術水準は世界で最も洗練されており、強大国からも一目置かれており、ソフトウェアによるインテリジェンス立国である。これに対し、日本は、国力基準である軍事力・政治力・経済力の三要素の中で核保有をしないことを国是とする国である。日本の繁栄には、ソフトウェアによるインテリジェンス立国を目指す。世界から最も信頼され尊敬される国にすることが欠くことができない——ということを銘記すべきであろう。では、日本のインテリジェンス（チエの働き）レベルの現状はどうか。

日本国民のインテリジェンスレベル（I）——日本の前途を危うくする政治家とジャーナリズム

このところ、日本国民全体のイン

テリジェンスレベルが目立って低下している。OECD（経済協力開発機構）やWEC（世界経済会議）の調査では、かつて高位にあった日本の国際競争力などの順位が急速に低下し、途上国と肩を並べるようにさえた。他の調査でも、日本の若者の回答には、他の先進諸国と際立って異質なものが多くみられ、知識の少なさや理解力の低さが指摘される。自嘲的に唱えるジャパンパッシングやジャパンナッシングの論者たちは、主な原因を中国の台頭に求めるが、そうではない。かつて世界のGDPの15%を占めた日本が、今10%を切った。国内の状況を見ても、若者だけではなく、政治家やジャーナリズムなどオピニオンリーダーのやることなすことに、インテリジェンスレベルの低下によるとみられる珍現象が次々と現出する。「市民参加」のイデオロギーに基づく裁判員制度を内容とする裁判員法が、国民の理解を問うこと無しに、つまり国民不在のまま、法務当局によって作成され、国会でもほとんど国民の目に触れる審議の無いまま通過して成立してしまっ

た。おまけに、成立後はジャーナリズム、特に新聞がその愚行の御輿を担いでキャンペーンに加担している姿も異様である。現在ねじれ国会で野党が何でもかんでも与党の審議の不十分さを抵抗の理由としていることとは対照的な現象であり、国民の政治不信を増幅している。また、自衛隊のイージス艦と漁船との衝突事件と沖縄の少女を米海兵隊員が強姦したとされる事件では、ともに政府と米軍の非道を重箱の隅を突付くなどの言葉では表現できないほど国会で野党の好餌とされ、連日のテレビや新聞の報道も粗探しと揚げ足取りの姿勢一本槍であった。いずれも殆どの新聞・TVが、被害者とは言え、その落度おとどについての指摘・説明を怠り、国民の正常な判断への情報提供の機能を欠いていたのもまた異常である。日露戦争時の戦時報道と勝利時の報道の熱狂が国民を誤った判断に誘導し、その後の日本の歴史を誤らせたジャーナリズムと政治の愚行の反省が、全く活かされていない。今後日本国家が歴史の分水嶺に立たされた時、間違いなく日本は再び危険な途を辿らされるであろう。すべ

る役割を担うオピニオンリーダー層、特にジャーナリズムと政治家の能力の低下に基因する。沖縄で集団自決をめぐる教科書検定反対の集会が開かれた時、実際には二万人に満たなかったのに「十一万人」と一紙が報道したところ、その情報操作に他のメディアが事実を確認することなく、こぞってその尻馬に乗り、誤った数字を報道し、政治と行政が振り回されて歪んだ結果を生んでしまった。肥大化したジャーナリズムの影響力の責任の重さが見直されなければならない。「インテリ」は、文字どおり死語となった。

日本国民のインテリジェンスレベル(Ⅱ)——情報に振り回されやすい

国民の側にも問題がある。情報にこのほか振り回されやすい。ノストラダムスの大予言については、TV番組でヒートアップし、単行本も600万部売れたと言われ、社会現象となった。それでも、予言当日になつて何事も起きなくても、それに動かされた人たちの怒りが爆発することは無かった。また、虚報を連

発し、歪曲や捏造記事で情報操作することに長けたある中央紙に対して、雑誌ジャーナリズムでは批判記事や特別の批判欄まで設けられたりしているのに、読者である国民の側からは、一向にポイコットの動きが出てこない。情報に振り回されることに無感覚なのだ。ここにもインテリジェンスレベルの低さが見られる。

世論や社会現象は、国民のインテリジェンスレベルの総和が増幅された形で示される。日本独特の社会現象に対する研究は、専門家の手によってもっと総合的になされてよいと思われる。しかし、世論については、現下の日本の置かれている状況から事は重大である。まず、情報に他愛なく振り回されることの無いようにしなければならない。そして、その状態から抜け出すだけでなく、海外の国ぐにの世論や国際世論を、相手の国益や利害を見据えながら日本の国益に適うように形成して行くにはどうしたらよいか、に思いをめぐらすことの出来るまで、日本国民のインテリジェンスレベルを高めることが急がれているのだ。ロシアとの国境線確定の問題にし

でも北朝鮮との拉致の問題にしても、返還無くして平和条約無し、拉致問題の解決無くして国交正常化無し、一本やりの単純思考では、物事は解決しない。相手国が何を考えているのか、何に困っているのか、相手国の世論や国民感情をどうしたら揺さぶったり日本の利益に適うように動かすことが出来るか、そして、相手国がそうせざるを得ないように国際世論をどのようにして形成することが出来るであろうか、ヤクザ、人身売買、南京大虐殺、捕鯨など、国際社会に現存する日本にとって不利な国際世論をどうやって解除すべきか、について、自分の頭で考えながら、TV番組の構成やそこに登場する人びとの発言あるいは新聞記事を批判的な目で見ると習慣が出来るようになれば占めたものだ。

囲碁にたとえてインテリジェンスを考える

ソフトパワーを示す「インテリジェンス（チエを働かせる）立国」でなければならぬにもかかわらず、この体たらくはどうしたこと

か。ではどうしたらよいか。

おのれの愚かさに気付き賢くなるよう、知能水準／インテリジェンス・リテラシーを間違ひなく上げることでできるヒントがある。囲碁を例にとって考えてみたい。囲碁には段級位がある。客観性のある力量のレベルを誰にも分かるように示すこと、そして、ハンデイクヤップがどれだけあるかを明確にすることにある。初心者から最高レベルまで日本棋院・関西棋院などからアマチュアに与えられる段位は一般に初段から六段までである。七段・八段もあるが、七段はタイトル戦優勝者や強い囲碁ライターなどに、八段位は政治家など特別囲碁界に貢献のあった人に与えられる。初段から下には一級から九級があり、九級は初段に対して打つ前に九子の黒石を、碁盤に記されている九つの星の上にハンデイクヤップを置く。「段に井目下手頭」と昔から言われているように、さらにその下のレベルの碁打ち（囲碁愛好者）もいて、一般に十七級までつけているがもつと下までいる。なお、高段の方で重要な意味を持つことは、アマチュア

の場合、五段と六段との間には大きな質的な差・厚い壁があることだ。プロの高段者に対してハンデイクヤップが五段の四子から三子になる力量が、アマチュア六段の格である。五段までは努力すればいけても、六段への道は険しい。なぜかという点、五段までは「勝とう勝とう」でいけるが、六段となると無理な手を打つことなく自分の方の力量が高ければ自然に勝てるようになる。それは「棋理に明るくなる」と表現される。棋理とは、囲碁の理法であり、宇宙を支配している理法にも通じるものである。六段は、その入り口に達したことを意味する。

「ゲーム力」を高めるヒント

さてその上で、「ゲーム力」をどうしたら高めることができるか、考えてみたい。

まず、およそ相手のあるところにはどこでも、自らを優位に立たせ相手の思惑に乗ぜられない情報戦が行われる。競争社会では、情報戦は熾烈となる。情報戦 (Intelligence Warfare) はゲームであ

る。ゲーム力を高める上で、知ってほしい二つの鍵を指摘したい。

一つは、「ゲームの定理」「インテリジェンスの定理」ともいうべきものである。それは簡単に言うと「力量の高い者は、力量の低い者が何を考えているのかが手に取るように分かる。しかし、力量の低い者は力量の高い者が何を考えているか皆目見当がつかない。」ということである。この定理は、相手のある関係で至るところに適用できる。ビジネスでも、男女間でも、国家間でも、相手のある関係ですべての場合に適用できる法則である。たとえば、「出来の良い人間は出来の悪い人間が何を考えているか手に取るように分かるが、出来の悪い人間は出来の良い人間が何を考えているか皆目見当がつかない」のだ。小泉純一郎総理をワンフレイズポリテイクスと揶揄した記者がそうである。臨機応変に記者の質問などに的を外さず短い言葉で答えを示すことは、並の人間ではできない。普段から広く深く思いを巡らせている人なのだ、と畏敬の念を抱ける人は出来の良い人間である。およそ相手のある関係に例外なく発生する情報戦

に通じる法則である。他人と接する場合、特に他国の交渉相手と接する場合、相手の力量がどの程度であるか、囲碁などと言う、何段位または何級位に類するかの評定をしてみるとよい。相互の力量を見極めた上でこそ、はじめて有効な戦略・戦術を組み立てることができるのだ。ただし、自分の人間の出来具合・力量が相手より上か同等であるかでなければ、相手を正確に評定することができない。相手の人間力が自分より上の場合には、正しい評定はできない。いはば、はじめから勝負がついているわけなのだが、その事実についてさえ理解することができないのだ。

もう一つ物事を見る時に銘記しておかなければならないことは、力量の「差」による理解の「差」に、上から下まで大きな開きがあることである。「同じ状況に置かれていても、受け手の理解の仕方には全く異なる相違がでてくる。」ということである。「全く同じ情報を得ても、その受け手にとっては、その理解する力量によって受け止められる情報量にはたいへんな差が出

てくる、上から下まで多くのレベルがあるのだ」という、言われてみれば当然ながら厳しい現実である。そして恐ろしいことは、「インテリジェンスレベルの低い人は、レベルの高い人がどの程度自分より深く理解しているかがわからない」だけでなく「自分と同じ理解をしていると考えている」という現実である。同じ新聞記事を読んだり、同じテレビの解説を見聞きしても、そこに示された問題の事実関係についての理解の能力差は激しく、問題の背景に思いをいたす度合の深淺の差も大きい。情報を受け手の力量には、囲碁で言えば高段者から十七級やもつと下までの恐ろしいまでの差がある、という厳肅なる事実を知ることである。リーダーは先見性を持って、と書かれたものを読んだ日本の経営トップたちを想定しても、そのとおりでであろうな、と感じるところで止まってしまう人から、先見性を持って簡単におっしゃってもそれを養うにはどうしたらよいのか、との宿題を新たに背負って日頃頭を働かせ、いよいよその解答を見出す人まで、大きな差が存在する。

そのことをインテリジェンスレベルの低い人間にはわかりようがないのだ。また、海外の論評だからレベルが高いと思つたら間違える。海外論評でも低レベルなものには沢山ある。たとえば国際関係で、ロシアのプーチン大統領に関する記事を見ると、その強いやり方からツアールの再来という形の受け止め方が殆どである。だが、囲碁で言えば六段格のかなり高度なインテリジェンスレベルを持った人がプーチン大統領を見る見方は違う。世界のトップリーダーの中で同氏が最も英邁な人物であると見抜くことができるし、また、プーチン大統領が何を考えているかが理解でき、どう行動するか読める。新聞社のモスクワ支局勤務を長くやっていた記者だからといって、同じように読めるとは限らないのである。

「読み」と「分析」

では、どうして力量に開きが出てくるのであろうか。どうしたらより高段格のレベルに達することができるのであろうか。ひとえに

「読み」と「分析」とが関わっているように考えられる。

「先見力」「洞察力」は、どうしたら養うことができるか。たとえば、いま世界を揺るがせているサブプライムローン問題は、突然現れたのではない。国際経済エコノミストの中前忠氏は、そこに潜在するリスクを、問題が顕在化する二年前から警告していた。ゴルドマン・サックス社は、リスクに気付き手を染めず、逆張りをして難を逃れるばかりか大収益を挙げた。ベルリンの壁が崩壊したのが1989年11月。それを遡ること三年前に竹村健一氏に紹介された在米の日本人評論家である那須聖氏は、「ソ連崩壊」という本を著していた。

「先見力」「洞察力」は、「読み」の深さに関わっている。直観力が関わることもあるが、直観力は、凝縮された集中力をもって読む力を養った挙句得られるものである。囲碁・将棋で見ると、変化も入れて数百手先を読める人がいる一方、十手先はおろか五手先を読むことさえもできない人が多い。また、「勝手読み」も多く、相手が自分の読み筋

どおりに打ってこなくて、「アツと驚く為五郎」となる。

「分析」と「読み」の深さは、現状を正しく認識することが前提となる。囲碁だけではなく、いかなるゲームにおいても、部分を大局の中でバランスよく捉えて対応することが重要とされる。世の中に生起する事象について、現状を正確に把握するためには、その専門分野のみを視座においている限りは不十分である。学問分野など人間が規定した区分に捉われては、真実に到達できない。直面する諸問題はいずれも、政治、経済、社会、文化、科学技術、国際関係、外交、軍事等々あらゆる分野が関連し相互作用しているのだ。これらについて360度展開して時代の変化に遅れることなく世界の動きを把握する、というアプローチをしていると、おのずから、いま誰もが気付かずにいる問題点や欠陥が見えてくるのである。

海外に対する「発信力」、「国際世論形成力」、さらには「国際標準／国際ルール形成力」は一連のインテリジェンス（ここでは「情報

活動」を意味する）である。これらを洗練された形で展開するには、高度な「ゲーム力」が加味されなければならぬ。まずは基本となる「論理」が必要である。その論理には、相手となる海外のしたたかな個人や企業や国家に「なるほど」と反論できないのみならず頭を下げさせるまでにいたる「分析」の裏付けが無ければならない。彼らは、囲碁で言えば六段格以上の豊かな力量を持った相手であると考えなければならぬ。それに対する日本の側の力量が、彼らを上回らなければ勝負にならない。「折衝力」は、「分析」、「論理」、それに加えて彼我を取り巻く現状認識と戦略戦術を誤らない「ゲーム力」による。相手の動きを前提とするゲーム力には、「読み」が重要な意味を持つてくるのである。

自分の頭で考える

「分析力」は、インテリジェンス・リテラシーの根源である「自分の頭で考える」ことに始まる。この場合も、自分の頭で考えるといっても、そのレベルには、初心者か

ら高段者まで、力量の開きは大きい。その力量を培う方法は、自分が理解できない問題を宿題として常時念頭に置き続けることである。「いろはかるた」を思い出してほしい。「犬も歩けば棒に当たる」「論より証拠」「花より団子」と、子供の頃から正月になるたびに、どういう意味であろうか、と四十八の宿題を抱え、なにかの拍子に一つずつ解決するなかで、自分の頭で考える力が養われた。高度なチェスの働き、賢さは、こうしたことから始まる。虚言妄言にまどわされない力、メディアの浅薄な言説に振り回されない力にもなる。

これに反し、日本の企業経営トップ、特にいまだに財務官僚の厚い保護行政下によりかかっている大銀行トップにみられる横目横並びの中からは何も生まれない。ましてイノベーションなど期待のしようもない。国際競争力をまったく欠いた日本の大銀行経営者は、欧米のみならずアジア諸国からも、その石化した頭を、ステューピッド(stupid馬鹿な)を超えてインコンピタント(Incompetent救いようの無い)だと軽蔑されている。に

もかわらず、日本の経済界では大きな顔をしている。ただの内弁慶である。だが、これがジャーナリズムを含め今の日本の指導者層を象徴しているのであろう。

その他インテリジェンス(チェスの働き)をめぐるQ&A

(一)IQは高められるか

IQ(知能指数)は、申すまでもなく、インテリジェンスレベルに深く関わっている。IQは先天的なものもあるが、かなりの部分が幼児期の訓練で向上する。いろはかるたの例で説明したように自分のアタマで物事を理解すること、各種多様な知能テストを沢山こなすこと。それに躰も大事である。心の持ちようや姿勢など立居振る舞いが自然の理法に適つたものになると、物事の理解力が高まるのである。柳生新陰流の極意は、仁義礼智信を尊ぶ人間のみそれを得る資格がある、とされる。また、江戸仕草の中に、「三・六・九」があった。三歳で「躰」を身につけ、六歳で「読み書き算盤」がひととおりでき、九歳になれば「分別」がつ

